interview

私たち、これが好き！

スポーツに対して「性別」で先入観を持っていたりしませんか？　かつては「男子のスポーツ」「女子のスポーツ」と思われがちだったものでも、現在は男女とも活躍しているものも多くあるようです。新体操をやっている男子チーム、野球をやっている女子チームの選手にインタビューし、そのスポーツを始めたきっかけや将来への思いを聞きました。

学校法人佐藤栄学園 埼玉栄高校
男子新体操部

昭和56年創設。部員は12人。
インターハイ団体優勝（平成26年）
埼玉国体総合優勝（平成16年）
全国選抜大会　個人総合優勝（平成29年）
全日本ユースチャンピオンシップ　個人総合優勝（平成29年）

女子プロ野球チーム
埼玉アストライア

平成25年創設の女子プロ野球チーム。選手は20人。本拠地は埼玉県。女子プロ野球リーグは現在、埼玉アストライアを含め全４チーム。
女王決定戦（日本シリーズ）優勝（平成29年）

左：佐藤千尋さん（外野手）
中：川端友紀さん（内野手）
右：加藤優さん（外野手）

子どもの憧れに応えられるプレーをしたい

――野球を始めたきっかけは

佐藤　小学校3年生からソフトボールをやっていました。大学生の時は男子硬式野球部のマネージャーをやっていたのですが、自分も野球をやりたくなってきて、大学2年生の頃から選手として男子に混じって野球を始めました。

川端　小学校3年生の時に野球を始めました。兄が元々野球をやっており、父が監督をしていたので、野球を見に行くうちに興味が出てきて私も始めました。

加藤　父が野球チームの監督をしていて、兄も野球をやっており、5歳くらいの頃から始めました。

――周りには男子が多かったと思いますが、苦労したことは

加藤　やはり体格の違いですね。小学校ではそれほど男女で差はなかったのですが、成長期を迎えて中学生くらいになると男子のほうが筋力が付いてパワーが上がるので、さすがに苦労しました。

川端　確かに体格差はありましたけど、走りと肩の強さは自信があってそれほど負けてはいませんでした。

――ここ最近の女子野球のイメージはどう変わったと思いますか

川端　可愛らしい子が増えた、と感じますね。子どものチームにも女子の人数が増えているようで、女子だけの野球チームができていたりして羨ましいです。

――女子プロ野球で選手になろうと思った経緯は

佐藤　大学で男子に混じって野球をやっている時、女子プロ野球があることを知りました。私は女の子の中ではどのくらい野球の実力があるんだろうか、と力試しをしたくなったのがきっかけです。

川端　私は女子プロ野球ができた1年目に入団しました。野球をやりたいという思いはずっとあり、ある時女子プロ野球ができるという話を聞いて、早速入団テストを受けに行き、合格しました。

加藤　アマチュア野球のチームで野球はしていたのですが、女子プロ野球チームと対戦した時にプロのレベルの高さを実感しました。私もよりレベルの高い環境で野球をしたいと思ってプロに入団しました。

――今後の女子野球はどうなってほしいですか

佐藤　高校野球の甲子園大会が好きで毎年テレビで観ていますが、今でも「自分も甲子園でプレーしたかった」と思います。今後「女子が甲子園で野球をする」ということが実現できるようなら応援してあげたい。

川端　女子のための「全国高等学校女子硬式野球選手権大会」という大会もありますが、甲子園でプレーできるとなお良いと思います。女子プロ野球も4チームに増え、少しずつ人気が出てきていますが、今後も一人でも多くの人達に女子プロ野球の面白さを知ってほしい。

加藤　昨年優勝した時は、地元の北浦和の商店街を優勝パレードで歩きました。地域の人たちに応援されているのが実感できてうれしかったです。

平成29年 日本シリーズ優勝後の地元（北浦和）商店街でのパレード

――野球をやっている、やりたいと思う子どもへ一言

佐藤　ひたむきに「野球が好き」という思いを前面に出してプレーし続けてほしい。楽しく野球を続けてもらいたいですね。

川端　野球って、初めはちょっと勇気がいるかもしれないです。"ボールが当たったら痛いかも"と思うかもしれないですが、実際にやってみれば楽しいはず。

加藤　女子プロ野球ができた今、私たちは野球をやっている女子の憧れの存在でもあると思います。私達も頑張らないといけないですが、将来女子プロ野球で活躍したいと思う子どもたちもどんどん出てきてほしいですね。

ダイナミックな演技を見てほしい

――新体操を始めたきっかけは

田中　姉が新体操をやっており、幼い頃からよく見学に行っていました。幼稚園の頃、たまたま男子新体操の教室が新たにオープンして選手を募集していました。自分もやってみようと思って応募したのがきっかけです。

松田　小学校1年生の時、学校の友達に「一緒にやってみない？」と誘われて新体操を始めました。見に行ってみたら、カッコよくて。

山上　小学校4年生の頃、テレビで『タンブリング』という男子新体操のドラマを見て、カッコいいなと憧れて新体操を始めました。

――当初、周りで新体操をやっている友達はいましたか

田中　やっぱりほとんどいなかったです。周りの男子は野球やサッカーなど他のスポーツをやっていて、友達同士で「昨日の試合どうだった？」みたいな話をしていましたが、僕の場合、周りで新体操をやっているのが兄弟くらいしかいませんでした。そこはちょっと寂しい気もしました。

松田　競技人口が少ない分、新体操をやっている人たちが集まって年上の先輩たちと一緒に練習する環境にあったので、僕はあまり気にしたことはないです。

山上　僕も同じです。ここの学校の男子新体操部は中高一貫校なので中学生と高校生が一緒に練習しています。新体操に打ち込んでいる仲間が集まっています。

――新体操ならではの魅力は何ですか

田中　女子の新体操は身体の柔軟性や技の綺麗さを表現しますが、男子は技のダイナミックさも重視した表現になります。女子と同じく技の綺麗さはもちろん、男子ならではの迫力を見せられます。団体競技で人を飛び越えるような大技は互いの信頼関係が求められますし、見どころです。ただ、男子が女子の演技を見て学ぶところも多いです。

松田　団体競技の技にはやはりチームワークが必須です。皆が互いのことを思いやって練習し演技することで、初めて綺麗な連携が可能になります。

――新体操で、男子ならではの苦労する点などは

田中　やっぱり身体的な問題があります。男子はどうしても女子よりも筋肉が付きやすく、筋肉が固まってしまうと柔軟性が失われます。思春期で身体が成長して筋肉が付くとうまく技ができなくなり、伸び悩んでしまう男子はいると思います。しっかり柔軟運動をするしかないんですけれど。

――今後の男子新体操はどうなってほしいですか

田中　新体操の演技はどのスポーツよりもカッコイイ。男子新体操は世界大会もオリンピックもなく、知名度はまだまだ低いです。今後もっと注目が集まって、世界的な大きな大会が開催できるようになってほしいと思います。

平成29年度 第８回男子新体操団体選手権　団体競技（東京体育館）